「閏」一句鑑賞

守屋　明俊

（五十音順）

朝顔市団十郎の色を選り　東　祥子

団十郎茶というように、やや明るい茶色、えび茶色、照柿色。その色の朝顔は配合を重ねての逸品という。団十郎ファンはこれを放っておけないだろう。「団十郎の色を選り」のさらりとした表現に奥床しさが感じられる。

空豆を二つ並べて福耳に　阿部　草薫

大きめの空豆を両耳に当ててみて「どうだ！」と。不謹慎と言う勿れ。家族で囲む食卓が俄然明るくなった。空豆から福耳への飛躍が面白い。

初蛍恋知らぬ子もうち連れて　伊澤やすゑ

「恋知らぬ子」と、恋をこれから知る初蛍の共演。何やら新鮮な取合せである。「うち連れて」に蛍狩の賑やかな雰囲気が漂う。

七夕や子らの歌へば菓子褒美　市村　啓子

七夕の願い事をしたあと、柱時計の下あたりで子どもたちの歌が始まる。大人たちも待ってましたと喝采を送る。歌ったご褒美に菓子が配られ子どもたちは大喜び。懐かしさ溢れる一句である。

二等兵の墓八月の日の強き　岩根　甲

故郷の墓地に元憲兵の墓を見たことがある。国分寺市内の寺では陸軍二等兵の墓を見た。日露戦役の際に川で溺死した兵の墓も。折しも八月。夏の強い日差しを浴びた二等兵の墓碑に、作者の記憶が蘇る。

シュノーケルの目前を行く烏賊速し　牛込はる子

水族館で見たのではなく、作者自身がシュノーケルをつけて海に潜り烏賊を発見したのだろう。「烏賊速し」の素晴しいリアル感が泳げぬ私には妬ましい。情景が鮮明だ。

ほつとする仕事帰りの片陰り　内海　範子

夏場なので退勤時刻にはまだ日が高く、袈裟懸けに肌を射す。真昼より長くなった片蔭を見つけそこに這入った時の思いが「ほつとする」。この実感には嘘がない。

電柱の細き片陰救ひの場　大下　壽櫻

この句の片蔭は日盛りのもの。他に片蔭が見付からないので、電柱の細い片蔭に身を寄せている。全身がその

片蔭に入るわけではないが、それでも「救ひ」だと作者は感謝。今年はまた特に暑かった。

悦びの握手は両手夏帽子　太田　裕子

普通の握手とは違う。両手での握手。しかも「喜びの」でなく「悦びの」というから、本当に会いたかった友との再会だったのだろう。互いに夏帽子を被っていてこれが明るい場面を演出している。

朝曇り若きら自転車出勤す　小河原政子

朝曇りは早の元という。念のため『広辞苑』を引くと「夏の暑くなる日の朝の、曇ったような空模様」とある。これから出掛ける勤労青年の自転車出勤の行先には熱暑が待っている。その彼らの健康を慮っての一句。

鳴きやみて我を見送る蟬をらむ　小野　直美

ふっと鳴き止んだ蟬。あの蟬は私をお見送りしてくれているのかも知れない。蟬の鳴く木に佇み、そして歩き始めた作者にはそう感じられた。「行ってらっしゃい、お元気で」一瞬心が和む。いい一日だったに違いない。

どの窓も青田風吹く村役場　金子かほる

涼し気な句だ。冷房などは要らない村役場。その代り、窓は全開。村役場の回りは一面田圃で今は青田風が頻りに吹く。風通しが良く、青田の匂いも窓から入ってくる。懐かしい風景。

三婆を観る羅の婆多し　金田　知子

『三婆』は有吉佐和子の小説。映画化された時の三婆は三益愛子、田中絹代、木暮実千代が演じた。テレビでは市原悦子が出ていたり、舞台では北林谷栄も出てい、曲者揃いだった。掲出句の三婆観劇者は概ね婆で上品な羅を召していたというが、いずれもが三婆かも知れぬ怖ろしさとユーモアが句全体から漂ってくる。

網戸変へ風の流れの新しく　金田　喜子

網戸は夏のものだが一年中使っている。長年使っていれば傷みも激しい。そこで新しい網戸と交換したところ今までの風とは違う心地いい風が入ってきたと、この作者は語る。「風の流れの新しく」の表現が的確で爽やか。

樟脳舟盥の縁のもみぢの手　北　好夫

セルロイドの樟脳舟を盥の水に浮かべ遊んでいる子等。「もみぢ」の形をした小さな手の可愛いこと。「盥の縁」でこの句の情景が完成した。〈樟脳舟脳の端つこ走りけり　飯島晴子〉のような句もある。

みづすまし何を描きたいのだらう　木山　有衣

水澄しの動きをよく観察した上での素朴な疑問。「何を描きたいのだらう」と読者を一緒に巻き込み、自在に動く水澄しに感嘆の声を上げている。

人と人あひだにシャガの咲いてゐる　久保田勝一

著莪の花をシャガと表記すると、別な花のように思えてくるから不思議である。「人と人」その間に咲くというのは何の暗喩なのか暗喩でないのか、これも摩訶不思議。理屈抜きで、ただただ神々しい魅力ある俳句。

烏賊さうめん有田の皿の模様透く　栗原　季星

生のするめいかを麺状に細く切った烏賊そうめん。その烏賊そうめんから有田焼の皿の模様が透けて見えたという。繊細な絵付けを施した皿であろうから、さぞかし美しかったと思われる。

あんれまあ四角の西瓜人の業（ごう）　小圷あゆみ

丸い西瓜でなく、自然に反して四角い西瓜を作ってしまう人間の業を皮肉っている一句。「あんれまあ」と優しく皮肉っているのが何とも作者らしい計らい。

わたくしを束ねないでとねぢり花　小泉まり子

螺旋にねじれた花の列が印象的。芝生や土手、どこでも自生できる丈夫な花で一本一本が独立している。乱立して咲くが、捩花は集団で観るより一本の個性を観たいもの。この句の花も「束ねないで」と可愛く訴える。

くちなはにゆくてをゆづる山ガール　幸喜美恵子

蛇の出る所には近づかないようにしていても山に入れば出遭ってしまうもの。でも、山ガールは慌てず騒がずじっと蛇が過ぎていくのを待つ。「ゆくてをゆづる」の心の余裕を、蛇でなくても平素から持ちたいものである。

蠅取り紙髪はり付いたははの声　小濱けえ子

蠅取り紙は食卓の上に吊すことが多いので、頭を上げた時などに毛髪がこの紙にくっ付く。さあ大変だ。粘着力が強烈でしかもこの蠅取り紙には蠅がいっぱい拿捕されている。そういう場面を作者は覚えていて、そこから亡母の驚いた声やその表情を想う。

秋扇身の上話戦後へと　小林ゆきお

「戦後へと」で人の一生が絵巻物のように広がった。今の身の上から戦前へと話は遡り、そして戦中・戦後へと苦労話は尽きることがない。同時代を生きた者同士、

話が弾み最後は苦い笑い話で終ったのだろうか。秋扇がやたら静か。

わたされし湯上りの嬰桃の香す　小林　玲

ひょっとしたらこの子、桃太郎？　などと言いたくなるような一句。育児をしてこなかったので湯上りの子の匂いを私は知らない。桃の香りとは……もう遅いか。

梅雨空を重し重しと観覧車　斉藤久美子

どんよりとした梅雨の空へ、元気なく、どちらかと言うと渋々昇る観覧車。作者にはそう見えた筈だ。梅雨時の雲の重さが観覧車に圧し掛かる。「重し重し」に共鳴。

法を説く僧のユーモア若楓　島　昌子

中学の修学旅行で奈良薬師寺の名物管主高田好胤さんの法話を聴いたことがある。ユーモアがあったということしか覚えていないが、瀬戸内寂聴さんも含め僧侶の法話は笑わせて心を惹き付ける。若楓の頃に法話を聴いたという作者もきっと感激したことだろう。

兄海兵かたくなに黙敗戦忌　嶋谷　宗泰

復員兵が多くを語らずに黙るというのは日本だけでなく、ベトナム戦争時の米国の復員兵もそうだった。戦争は殺し合い。殺す理由のない民草も殺して人の心が壊れない訳がない。「すまぬすまぬを背中に聞けば、馬鹿を云うなとまた進む」で進軍し全滅した部隊もあったろう。敗戦忌は全くその通り。

父は意志通せど強ひず青田風　清水　悠太

尊敬できる父を持つ作者。子どもの考えを尊重し自分の意見を押し付けたりはしない。その代り、自分の意志は誰が何と言おうと貫き通した。その父が青田風のようだと作者はいう。作者もまた今、青田風の中に居る。

水平線地平線なし都市炎暑　首藤　久枝

気候の変動が甚だしかった今夏。東京のような大都市では炎暑どころか炎上するのではないかと思われるほど蒸し上がった。かつては見えた水平線も地平線もどこかに消え、高層ビル群の都市はもはや廃墟のようにも思え燃え尽きる。作者はそれを「都市炎暑」という。

木々の影重くなるころ水を打つ　正田　和子

日盛りである。強い日差しは木々の影を重く、濃く、大地に張り付ける。水を打ちそれをほぐしてあげねば。作者はなみなみと水の入った柄杓を幾度となく撒き、涼風を誘い、涼しさを待つ。異常な暑さの一日。

オリエンタルリリーを添へて犬を焼く　新海あぐり

愛犬の死を詠む。この句の前後に〈老犬に点滴三本西日濃し〉〈愛犬の柩に甘酒捧げをり〉がある。作者が添えたオリエンタルリリーは沢山の百合を交配して作られるエレガントな百合。作者や家族の、死を悼む心が感じられる。最近「ペットロス」という言葉を聞く。

試歩に出て虫踏まぬやう夏の昼　菅原　淑子

暑い最中に外出し、しかも試歩の足元がおぼつかないのに「虫踏まぬやう」の心。頭も眼もしっかりなさっていて敬服した。

気前良き漢のやうな夕立かな　杉渕真喜子

気前が良いというのは金銭などを惜しまず使う気性、そのようなさっぱりした気性をいうらしい。この句の夕立の激しさが正にそう。尤も、激しいといっても昨今の線状降水帯、ゲリラ豪雨に「気前良き」と言うのは憚られる。強いて言えば「ねちつこい漢のやうな」か。

海峡を渡れば他国鳥雲に　鈴木　智子

北へ帰っていく渡り鳥への惜別の一句。「渡れば他国」の韻律の厳しさが惜しむ心を増幅し、それが読者の胸に響く。句の調べの良さに注目した。

熱帯夜なにも纏はず朝迎ふ　鈴木　藤子

今夏の日本の平均気温は観測史上最高だったという。作者の住む岩手県も熱帯夜になったとは驚きだ。冷房機の必要がない地域だから夜の熱暑はさぞかし身に堪えたことだろう。「なにも纏はず」は大仰な言い方だが、形振りを構ってはいられない。水分は補給されましたか？

パイナップル身振りの多きイタリア語　高橋　章子

作品「ヴェニス紀行」の中の一句。公設市場の果物屋だろうか。イタリアは果物の種類が豊富な国。このパイナップルはアフリカの象牙海岸辺りからの輸入品かも知れないが、それを買うにも身振りの多いイタリア語が飛び交う。作者もそこに加わったのかどうか。良い旅を。

夏山に人の小さきそが嬉し　髙橋満利子

夏山の偉大さを讃え、一方でちっぽけな人間どもがその山へ果敢に挑戦していることを讃える。挑戦できるのは人類が生きている内だけだから、山もそれを知っていて、ちっぽけな人間を大目に見てやっている。さあ、登って来いと。

知のあゆみ括る記念誌虹の立つ　高橋美智子

作者はこの夏に発刊した『コロナ徒然草―上水木曜ミ

ニ句会百回記念句集』の発起人の一人。毎週メール句会に参加した、その集大成が合同句集となった。コロナ下の二年半は正に「知のあゆみ」。虹が立ち、目出度い。

船遊びこのまま行かば補陀落へ　竹森　美喜

船遊びから補陀落への飛躍が鮮やか。補陀落は南海にあるという観世音菩薩が住む山。作者を乗せた遊び舟が隅田川を下り海へ出て、「このまま行かば補陀落へ」連れて行ってくれる。作者の秘めた願いと見た。

栗の花愛らしき実にならうとは　田中　京

蛇瓜の白い花は蛇瓜になるとは思えないほど可愛い。一方、栗の方は花が陰湿で、独特の臭いがあるけれども実に生ってみると愛らしい。その格差に作者は「愛らしき実にならうとは」と感嘆した。果して、人間は如何。

明日へとねずみ花火の行きたがる　寺田　幸子

弱虫だったので、ねずみ花火に火を点けると私は逃げた。何処へ飛ぶか解らない。自分のところに来るのではという恐怖心。でもこの句の作者は聡明で、明日へ向かい、しゅるしゅる飛んでいくのだという。明日とは勿論、きっと明るいであろう未来。前向きで面白い趣向の句である。

夏うぐひすうぐひす嬢といふ仕事　長井　敦子

とぼけた句で、作者の本領が発揮されている。夏鶯から「うぐひす嬢」を引っ張り出してきて、選挙カーの中から手を振らせている。ことば遊びの面白さを堪能した。

望郷や風鈴の音を通話越し　中嶋きよし

ふるさとの親しい方との電話。声とは別に風鈴の涼し気な音が聞こえ、俄かに望郷の念を抱いた作者。上五に「望郷や」の強い言葉を置き、あらためて故郷を想う。

暑き日やドクターヘリが校庭に　中村　敬子

緊急に着陸した所が学校の庭。生徒が熱中症に掛かったのだろうか、緊迫感のある句である。冷房の無い北海道の学校ではこの夏、35℃の猛暑に授業を二時限で切り上げたところもあったと聞く。ドクターヘリの出番がないよう祈りたい。

汗どつと三角チーズのフィルム剝く　中村　東子

誰もが知っているあの三角の形のチーズ。覆っている薄いフィルムを剝いて齧るが、作者はそこに着目した。ワインの当てにしているのか。汗が退いていくよう。

伽羅蕗を配りて無事を確かめに　中村　幹子

料理が好きな作者。健康が気になる近所の方のお宅を訪ね、手ぶらではなんだからと自家製の伽羅蕗を配ったのだろうか。「無事を確かめに」が泣かせる。人との関わりが薄くなった現代には作者のような人が居てもらわないと困る。そのようなことも思った一句。

炎暑ゆく蟻にくれたり飴ひとつ　野沢　慶子

ご苦労様と、熱暑の道端を歩く蟻に飴を与え、労う。一日一善でもないのだろうが、善行である。そう言えば干乾びかけている蚯蚓に少量の水を差し掛けている人を見たことがある。これも善行。この句、「蟻にくれたり飴ひとつ」の調べがとてもいい。

嘘一つつけば一匹蛍死ぬ　橋本　恭子

「嘘だろう」と思いつつ注目した一句。嘘ついたら針千本どころではなく、蛍が一匹死ぬという。これでは、嘘つきは蛍狩に行けない。どうしよう。蛍の命の詩。

健やかをよそほふ妻の蛍狩　長谷川菊男

健気にも元気を装い、心配させないよう蛍狩に同道する妻。その病の深さを知っているからこその切なさが、一句に滲み出ている。

亡き犬が尿(ゆばり)した場所猫じゃらし　長谷部幸子

愛犬の死をあらためて偲ぶ追想の句である。かつて散歩していて必ず尿をした路傍、そこに猫じゃらしが今、たくさん揺れている。それだけのことだが切ない。

あの先の片蔭に入り水呑まむ　浜田　優子

どこまでも熱い一本の道。息が切れて倒れそうなその時、顔を上げると向うに片蔭が在った！　作者にはオアシスのように感じた筈だ。「水呑まむ」は安堵と歓び。

青嵐風鐸揺らし詩を零す　原田ミチ子

五重塔の風鐸だろうか、青嵐が吹き大きく揺れている。この句は、揺れているという事実のみを詠むのではなく、そこから風鐸が「詩を零す」というところまでも感じ取っている。青嵐と詩との響き合い。その感性に共鳴した。

髪洗ふ少年よりも単純に　春田　千歳

〈五十なほ待つ心あり髪洗ふ　大石悦子〉〈洗ひ髪かわく間月の籐椅子に　杉田久女〉など様々に詠まれてきた「洗ひ髪」。掲出句は「少年よりも単純に」と詠むが単純ではない。人生がいよいよ単純化しつつあるということなのか。〈髪洗ふ草のふかさをさぐるごと　正木ゆう子〉

とは逆に、毛髪が単純になったということなのか。

ピカドンも郷愁のうち長崎忌　平野　豊雄

戦後生れの作者は13歳まで長崎で育った。父君は長崎に原爆が落とされた時、夏風邪で出勤せず家に居たために運良く被爆せずに済んだという。被爆死していたら作者はこの世に生まれてこなかった。掲出句の「郷愁」はその作者だからこそ真実味がある。8月9日、長崎忌。

スイッチバックは遊園地めく夏の旅　平野　美子

スイッチバックは遊園地に無いが、バックする感触はむかし遊園地で体験したことがあるような。何に乗ったのだろう。この句は「遊園地めく」の比喩に意外性がある。遊園地にて遊ぶ感覚の夏の旅。

ぱったりと尺取静止要支援　本多　遊子

要支援は、日常生活動作を行う能力がわずかに低下し、家事や歩行などに何らかの支援が必要となる状態の方。この句では歩行困難な尺取虫に「要支援」を要請していて笑いを誘うが、実際は作者の身近な要支援者を詠んでいるのかも知れない、少なくともその発想は。「尺取静止要支援」の滑らかな言葉の斡旋が光る。

炎天や槍投の描く放物線　水谷　光子

能村登四郎に〈春ひとり槍投げて槍に歩み寄る〉の抒情句がある。この春の句に対し水谷さんの句は「炎天」の下での槍投げを詠む。個人競技ゆえの孤独感、一投に際しての真剣な眼差し、気合。一気に投げ切った槍は空へ向かいそして放物線を描いて大地に刺さる。炎天下のこの放物線に作者は美を感じ、投じた若者を労う。

汗ぬぐふかすかな動き慰霊の日　持田きよえ

汗は拭っても拭っても額から首筋から噴き出る。祈りの日である。静かに参列しその汗を押さえるように拭う。「かすかな動き」の所作そのものに祈りのようなものが感じられる。

街薄暑デキシーランドジャズ流る　森尻　禮子

夏はジャズがお似合いだ。『真夏の夜のジャズ』という第5回ニューポート・ジャズフェスティバル（一九五八年）のステージを収めた記録映画があった。セロニアス・モンク・トリオ、アニタ・オデイ、ジェリー・マリガン・カルテット、チャック・ベリーなど錚々たる面々が演じた後、クライマックスにルイ・アームストロング率いる楽団が登場。そのシーンではデキシーの名曲『聖者の行進』その他を聴くことが出来る。味わい深い演奏

だった。翻って、掲出句の「街薄暑」にもジャズの香りが感じられる。練り歩く軽快なテンポが魅力。心が躍る。

蚕飼村に桑原の姓青葉風　山田　雅子

「桑原」は「桑原」。農民の苗字の使用は明治以降。「桑原」の姓を選んだというのは、この村がそれ以前から養蚕の盛んな村であったことを窺わせる。蚕飼村は「おかいこさま」と一心同体となって命がけで蚕を飼った。桑の葉も傷つけぬよう大切に摘んだ。八十八夜頃には桑の芽も伸び大きくなる。すでに青葉風が吹き、養蚕農家は蚕の孵化を待つ。

水団を食べるならはし終戦日　横須賀智子

アッツ島玉砕の昭和18年には食糧難が始まり、敗戦の年には国民は食べ物に窮し悲鳴を上げていた。戦時栄養失調。そして戦後にかけて空腹の日々が続く。水団も食べた。ただし、水団はそれ以前から腹の足しとして、東京の下町ではぶつ切りの長葱と鶏肉を入れて食べていた。今の品川区の大崎町辺りではお盆のお供えに茄子と茗荷を入れた澄まし仕立ての水団を作った。貧しかった当時を偲び、平和を祈り、いつ頃からか掲出句のように終戦日には必ず水団を食す行事が始まったという。「食べるならはし」に歴史あり。

令和6年版　俳人協会編「俳句カレンダー」頒布

体　裁　月別　表紙とも十三枚綴り壁掛用
内　容　表紙　細見綾子
西山睦・三村純也・山口青邨・大石悦子・坂本宮尾・鈴木直充・仲村青彦・松尾隆信・深見けん二・古舘曹人・後藤比奈夫・鷹羽狩行・亀井雉子男・和田華凜・大串章・大野林火
（掲載月順）表紙を含み四九七句掲載
（ジュニアの俳句十句掲載）
頒　価　一部　一二〇〇円
送　料　「閏」俳句会を通して購入される場合の送料は「閏」が負担。
発送予定　十月以降
申込先　左記へお申し込みください。なるべく句会単位・グループ単位でお申込み頂ければ助かります。もちろん、お一人でのお申込みも出来ます。
〒187-0023　小平市上水新町1の21の22
小圷あゆみ
電話　090（5543）4538
申込方法　葉書又は電話で承ります。
希望部数、お届け先名および住所は必ず書いてください。

閏発行所